

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第11章



～イン 断片的な歴史記録のごく一部を除いて、はるか昔に過ぎ去った時代

エンジェルズの薄れゆく記憶によれば、エルジョ族が特別な種族ではなく、日光によって滅びることのない種族だった時代があった。世界が若き頃、彼らの数はかつてエデンの園に広がっていた緑の草原の草のように膨大で、昼の光に邪魔されることなく、広大な空を自由に歩き回っていた。しかし、時の法則がすべての季節を刻み、夜明けの空が星の幕が引くように薄暗くなるように、かつて輝かしかつたエルジョの時代もまた、闇へと消え去った。

ああ、歴史上必ず起こる災厄の出来事にもかかわらず、エルジョ族はたとえ母方の血縁関係というだけの理由であれ、彼らは母である見捨てられ、罪に定められた天使ルシファエルと共に墮ち、滅亡へと至った。これは実際に起こったことであり、こうした出来事のぼんやりとした記録は、まばらな外典、古代の巻物、粘土の円筒に散在しており、地獄創造以前の短い時代 監視者とグリゴリ、すなわちネフィリムの、断片的で比類なき時代 を明らかにしている。

そしてギボリム、すなわちエルヨとエリウド、そしてあらゆる形や姿の巨人やグロテスクな怪物たち。この古代の時代に関する簡潔で広く知られている記述は、巨人がかつて地上を闊歩していた初期の時代に関する人々の記憶のほんの一部しか明らかにしていない。

初めに、神は形のない虚無を創造し、それを混沌と呼んだ。

混沌から、彼は神の子らである天使たちを呼び出した。彼は、彼らが栄光に満ちているのを見て、

彼らの似姿にエロスという名をつけた。彼の最も優れた、そして寵愛された天使たちと共に光、アポロと明けの明星、彼は闇と昼を分けた。

彼らにエレボス、ニュクス、ヘメラという名を与えた。そして天使アポロンの天上の輝きの中で、彼は昼を創造した。天使明けの明星の地上の光り輝く彼は夜を作った。それから神は天使ヘルメスを動かして召喚した天使ガイアの兜をかぶって大地を形作った。

地上を覆い、天使ウラノスの盾を召喚し、

神は地上に生命の霊薬を蒔かれた。そして、神は地上に種を蒔かれた。

内外ともに、ウラノスの水で、彼は剣を呼び出した

天使エーテルは水の中に大空を創造し、空と海を分け、天使オケアノスとテティスに

水の監視者たち。そして、それは真実となった。

～*～

そして天の下で主は世界の三分の一を

山脈と谷が陸と海を隔て、世界を覆う

彼の天使たちによって形作られた無数の王国と共に、ベストメデウス、ホミネデウス、アルテミス、ディオニュソス、デメテル～植物、魚、鳥、獣、そして人間の多くの王国。彼の地上の庭園、

よく造られた。そして、彼が闇と光、陸と海を分けたとき

そして空に、神は天使たちを分け、その三分の一を呼び出し、

地上に降り立ち、地上の守護者として仕える。

～*～

そして神は、神の三分の一である地上の天使たちを祝福した。

天の天使たち、そして彼はこれらの神聖な守護者たちをグリゴリと呼び、

世界の監視者たち。そして神は彼らに出て行くように命じた。

人と獣の世界へ、そして子を産み、増えよ

主はご自身の創造物の中に自らを現された。そして主はご自身の唯一の

要求して、彼らにこう言った。「彼らが彼のすべての恵みにあずかることができるように。」

創造物でありながら、人間と獣の実と種から生まれたこの実は
厳禁。そして彼はグリゴリと監視者に支配権を与えた。

地上を支配し、それを服従させるため。そしてそのようになった。

～*～

記されている通り、ほんの短い間ではあったが、確かに地上には巨人たちが存在した。天使たちが監視者と呼んだ巨人たちと、彼らの直系の子孫である巨人族、そしてさらにその子孫であるグロテスクな巨人たちである。彼らは公然と人間社会に溶け込み、人間は彼らを神聖な存在として崇拜し、彼らのために神殿や祠を建てた。

しかし、創造の最初の日々を生き延びた闇の深淵から、パンドラの人々がデーモンを発見するはるか昔に、3体の非物質的で霊的なデーモンが現れ、切り離すことのできない荒廃の三位一体として存在した。そして、彼らの名前の神聖な意味は、運命、破滅、そして死であった。この3体のデーモンは、計り知れない汚れた霧のようにエデンの園に覆いかぶさった。まるで一つの腐敗の雲を構成する3つの疫病が合流したかのように、彼らは地上を覆い、人間と天使の心と精神を共に暗く染めた。この3体のデーモンの存在によって、ほとんどすべての監視者が誘惑に陥り、神の創造物を欲した。神の子らが人間の娘たちの飾らない美しさを見たように、ルシファエルと呼ばれるある神の娘もまた、同じものを見たのである。彼女はあの暗い霧の原初の悪魔たちに圧倒され、墮落させられた。虚栄と欲望に閉ざされていた彼女の目は、人間のむき出しの輝きに開かれた。こうして彼女は彼らの中から多くの夫を選び、彼らと交わり、毎日毎晩、墮落した子供を百人産んだ。

地上の天使たち 世界の監視者 は、妻や夫と共に主の御前から逃げ出し、山々の下に身を隠し、邪悪な行いを秘密にして、内外を問わず世界を完全に支配するという契約を交わした。そして、この裏切りの契約 天使と人間との意図的で冒瀆的な異種交配 から、神が創造の最初の日々に意図していなかった、強大で醜悪な存在が生まれた。これらの不敬虔な人間の企みは、ネフィリムとギボリム、ティタンとキュクロプス、ヘカトンケイルとゴルゴン、竜とワイバーン、セイレーンとラミア、人間のサキュバスとインキュバス、エリウドとエルジョ、キメラと多頭の怪物、

陸、海、空に棲む目を持つ生き物たち あらゆる種類の不浄な忌まわしい存在は、最終的には伝説や伝承に登場する無数の不思議な幽霊として歴史に名を残すことになる。彼らは皆、不自然な存在であるという点を除けば、それぞれ異なっていた。それは、原初の神聖な設計に対する冒瀆であった。そして、これらの不自然な忌まわしい存在はすべて、総称して「デーモン」と呼ばれていた。デーモンの時代には、多くの巨人がいた。恥辱、陰鬱、そして裏切りの沈黙がついにエデンを覆い、こうして神の創造の無垢さは消え去った。

世界の監視者の中でも、特に美しい監視者は彼女は天界と地上の天使たちの中で最も輝きを放ち、天界と地界は彼女の数々の偉大な名前、光のヘイレル、庭園のリリス、天界の明けの明星、そしてその他無数の名前の意味を知っていた。しかし、謙遜は彼女にはなかった。彼女は傲慢な天使であり、劣った像で自らが認識する輝きを損なうことを恐れて、人間が彼女に似せて神殿や祭壇を建てることを禁じた。天使エレボスとガイアの不運な果実として、彼女は確かに両方の種であった。

地上の闇が顕現し、昼の光さえも彼女の前では色褪せてしまうほどだった。人間は、この美しい地上の天使の名を囁くことしかできなかった。

男は彼女を「ルシファエル」と呼び、秘密裏に夢の中で彼女の仲間を呼び寄せ、彼女は男たちの彼女への欲望の炎を鎮めるために現れ、これらの男たちは彼女の子供を千万倍も生んだ。これらの翼を持つ子供たちはエルジョであり、空は遮るものなく、エルヨは一斉に、まるで明るい鳥の巨大な雲のように天へと舞い上がった。空に向かって噴火し、飛行中、その膨大な数は、地上において、人間はエルジョ、すなわちルシファエルとその一族の多くの子供たちを見て、彼らを驚異的だと感じた。しかしながら、三つの闇の災厄が天使と人間の両方の心に降りかかり、地上の天使たちの最後の時代が訪れようとしていた。運命、破滅、そして死は、それぞれに謁見を求めた。

地上の監視者とその人間の妻や夫の多くは山の奥深くに身を隠し、一方、彼らのグロテスクで獣のような子孫の多くは大空と海を支配していたため、玉座は天使ラファエルを遣わしてその懸念を目撃させようとした。こうしてラファエルは人間の霊として天から降りてきて、地上の誘惑に屈しなかったわずかな墮落していない監視者たちと対峙した。彼らは、秩序のミカエル、分裂のガブリエル、

道の神アズラエル、精霊の神サラカエル、ウリエル、レミエル、タディエル、そして数えきれないほどの聖なる階級の主神たち。そしてミカエルは、自分が目撃したすべてをラファエルに明らかにした。

ミカエルはラファエルに、監視者たちの大部分、すなわち神の子らが人間の子らを妻として娶っていることを説明した。

そして、大地を受け継ぐ多くの力強い子供たちを産んだ夫たち。

マイケルは、墮落した監視者たちがハレメル山で交わした盟約について語った。

ドゥダエルとウル谷に姿を消す前に、彼は特に彼らの数について語った。なぜなら彼らは非常に多かったからである。ミカエルはラファエルに彼らの名を明かした。彼らは自らを十人の長と称していた。彼らはセムヤザの天使たちの裏切り者の軍団であり、エゼキエル、剣のサマエル、光のルシファエル、門のケルベロスとヒュドラ、運命のアザゼル、火のプロメテウス、言葉のヘルメス、キスデヤ、マチェット、アトラス、アラキエル、そして彼らの下に仕える何千、何千もの地上のデーモンたちであった。

ラファエルは、神の声を捨てて地球を自分たちのものにした監視者たちが、その後、彼らに反対する多くの天使を殺害したことを知った。ラファエルはまた、彼らが人間を邪悪な誘惑と服従のために行った数々の行為についても知った。特に、セムヤザ、サマエル、アザゼルが人間の娘たちのためにくじ引きを行い、多くの妻を奪い、ルシファエルは人間の息子たちの中から夫を選んだことを知らされた。ラファエルはまた、人間は十人の長や彼らの冒瀆的な契約に忠誠を誓ったことは一度もないが、それでも人間はこれらの天使たちの意志に逆らうことができず、

山々の麓に永遠に封印するという脅しで、イエスを誘惑し、恐怖に陥れた。

ラファエルが地上で起こったすべての出来事を目撃し、学んだすべてのことを携えて天に戻ったとき、主は地上のあらゆる悪を浄化し、その姿を汚すよう命じられた。すると、御座の怒りが様々な形で世界に降りかかり、主は多くの反逆的な監視者たちが創造の姿を変えてしまったのをご覧になったので、汚れていない残りの天使たちの力、地位、権威も変えられた。その結果、彼らは霊において一つに固く結ばれていたにもかかわらず、まるで完全に別々になったかのように見えたのである。

主は忠実な天使たちに、分裂の剣と秩序の盾を与えた。前者はガブリエルから、後者はミカエルからである。主はまた、彼らにアズラエルの通路の翼とサラカエルの兜を与え、こうしてすべての忠実な天使たちを

皆、戦える態勢を整えていた。神によって定められた期間、神の尊き息子娘たちは、区別のつかない、決して途切れることのない兵士となった。そして、玉座の前に召集されたこれらの途切れることのない天使の軍団を、主は混沌と名付け、ご自身の秩序と同じように秩序を与えた。こうして、彼らの集団は玉座の秩序となった。

こうして、神の玉座を背に、武装した天使たちが集結した。

地上の兄弟姉妹に対して。

ああ、記録は永遠に石に刻まれ、出来事は時の最も古い石板と書物に永遠に凍結され、こうして恐るべき神聖な物語が始まり、千年戦争と大天使分裂の始まりを告げた。地球は苦しんだ。

偉大なることに、その完璧な庭園は、隷属と罪、謙遜と傲慢、そして神と天使への揺るぎない忠誠の列の下に、徹底的に掃き清められ、押しつぶされた。人間が忍び寄る暗黒の世紀として測った時の流れの中で、天使たちは輝かしく決定的な瞬間を目撃した。エデンの園のすべての歌鳥は沈黙し、戦い合う天使たちの耐え難い叫び声の下、忘れ去られていった。

創造のこの荒涼とした時代、地殻が足元で崩れ落ち、苦い雑草と天使の破壊の種以外、何も育たず実を結ぶこともなかった時代に、人は故郷を捨て、世界の四方八方に逃げました。砂漠、海、山、そしてあらゆる過酷な気候を勇敢に乗り越え、天使に少しでも似た者から身を守るため、地球上で最も人里離れた未開の地を求めました。そして、千年もの間、地球の果てに身を隠したのです。

主の霊は復讐の剣として地上に降り立ち、再び天使ヘルメスを通して働かれた。主は第二の証人として、ラファエルでも、天にも地上にもいる他のどの天使でもない者を召された。代わりに、主は謙遜で忠実な書記を召し、主の霊の中を歩み、啓示されたすべてのことを記録するように命じられた。こうして、主はヘルメスを通して、ただの人間、メトセラの若い息子を召された。メトセラの部族の長老たちはこの若い書記を「霊の中を働いたメトセラの息子」と呼び、主は彼をエノクと名付けられた。

主の霊はエノクをハレメル山頂へと導いた。そこは十人の族長たちが神に誓いを立て、自らを人間の神と称した呪われた山であった。そして主の声はエノクに、記録用の円筒にすべてを書き留めるよう命じた。

主が見たもの。エノクは神の言葉に従い、後世のために記録を残した。記録を記していた当時、ハレメル山の頂上にいたエノクは、霊の目で見たものによってかなり老いていたが、それでも霊と御言葉に動かされ、神が彼に見せてくださったものを書き記した。彼の記録は血から始まった監視者たちの決定的な戦いから。主の霊はエノクを山の頂上に残し、復讐の剣として地上に降り立った。千万の天使の軍団が剣の後ろに集結し、十人の長を探し求めた。そして剣は彼らを見つけ、彼らを罰した。エノクがそれをすべて記録していたまさにその時。

たちまち、大地は打ち鳴らされた銅鑼のように鳴り響き、創造の歴史上最大の衝突によって徹底的に傷つけられた。川や小川は血で赤く染まり、疫病や伝染病は火の嵐のように広がり、森全体が粉々に砕け散り、山々は崩れ落ち、谷は千の軍団の腐敗した残骸で膨れ上がった。天使の波とタイタンの衝突は、破壊の雪崩となって押し寄せた。あらゆる種類の怒号、渦巻く塵、轟音、燃える灰、そして恐ろしい叫び声が空気を満たし、空さえも耳をつんざき窒息させた。そして天が息を潜め、天使たちがその下でうめき声をあげ、うなり声をあげる世界から恥辱の視線をそらしたとき、神の玉座さえも、最も不浄な反乱の瀬戸際に立たされているように見えた。計り知れない破壊の決定的な日に、十分な数の天使、人間、そして

獣の数は、上空の星の半分に相当するほどに滅びた。

神の怒りは、反抗的な監視者たちの熱意を焼き尽くし、主の言葉はすべての海を越えて響き渡った。神は天使ガイアとエレボスに、神に背いた天使たちのために、地の最も深い場所と地底の海域を分け与えるよう命じ、反抗的な天使たちは皆、人間を恐怖に陥れたのと同じ運命、すなわち永遠に山の下に封印される運命を辿るよう命じた。こうして、神の裁きの日の最初の光の中で、神は破滅の夜明けをもたらし、地獄が誕生したのである。

主の刃は、剣によって死ななかつた反逆の天使たちを呪い、滅ぼした。そして主は彼らを等しく呪った。かつての美しさは消え失せ、彼らの容姿は内面も外面も獣のような醜さに満ち、神の御前では忌まわしい存在となった。

主は彼らを地の胎内、ガイアとエレボスによって定められた暗黒と想像を絶する恐怖の王国へと投げ込んだ。そして主は彼らを追放したこの王国をタルタロスの地、ハデスの領域、忘却、死、破滅、地獄と名付けた。そして主はこの王国と墮落した監視者たちの上に大なる封印を施し、これらの邪悪で冒瀆的な天使たちが玉座の前で裁きを受ける時までそれを維持した。この大なる封印は主の剣によって削られた三つの門石から成っていた。これらの門石は、まるで精密でありながら不可解な三つの連結されたタンブラーのように動き、それによって冥界と監視者たちの大なる深淵を、人間の高次の領域、すなわち天界から物質的に隔てていた。

そして、人の息子と娘が、
神、主は、人間の罪と、人間と天使たちとの親密な関係を否定されなかつた。
彼の罪のために、十人の長の軍団と彼の

故意にそのような悪行を秘密にしていたため、主は頭、心、体、目に四つの永遠の罰の印を刻まれた。頭には、愚かな性質の恥を悟るほど賢くなるように、知識という罰を刻まれた。

神は、その心に不安の念を宿らせ、その魂は目の前に突きつけられるあらゆる誘惑に苦しみもがき苦しんだ。その肉体には、生と死の重荷と苦痛を宿らせ、その肉体は土に還るまでの短い期間しか生きられなかった。その目には、世の光が宿らせられ、その目は神と天の天使たちの御顔を見ることもできなくなった。そして、人が恥辱と祈りの中でひざまずいた時でさえ、神は彼をこの姿に似せて創造されたのである。

主の怒りが、裏切り者の監視者たちのように人間を完全に滅ぼさなかったのは、ただ神の恵みによるものでした。しかし、神は人間が望むならば、同じ忌まわしい運命を受け継ぐことができるだけの時間を与えました。約束された贖いの短い生涯において、天国はもはや与えられた贈り物ではなく、罪の赦しによって得られた楽園となりました。そして、あらゆる行動、意図、あるいは言葉の息吹によって、神は自らの運命の主として仕えることになります。神は自ら選択するのです。永遠を天国、秩序、そして救済の王国で過ごすか、タルタロス、混沌、そして破滅の王国を受け入れるか。神がしばしば計り知れない神秘的な方法で働かれる証拠として、神は人間と天使を完全に分離しませんでした。おそらく、かつての神の怒りは、ご自身の息子や娘、そして人間の息子や娘に対する絶え間ない愛に勝るものではなかったのでしょうか。神は、たとえ心と精神においてのみであっても、それぞれが互いに交わり続けることを許しました。

人間は墮天使たちを称えるために神殿を建て続け、助言や供物、助けを求めて定期的に彼らの霊を呼び出しました。そして、これらの追放された天使たちは、神と天の天使たちに対して永遠に恨みを抱きながら、タルタロスとハデスの広大な冥界に追放されましたが、しばしばかつての美しく馴染み深い姿で人間の前に現れ、占星術、火、金属、雲、魔法、石、獣、川や海、そしてかつて天によって厳重に守られていた秘密など、創造の多くの真実を人間に啓蒙しました。

しかし、特に墮落した監視者の一人は、失われた美貌と、かつて享楽に耽溺していた自由を恨み、深い闇と絶対的な孤立の時代を耐え忍んだ。タルタロスの最果てに醜さを隠し、黒くねじれた木々が生い茂り、水が泥水たまりのように沸騰し、息づく泥沼と化した荒涼とした地に身を潜めた。自ら選んだ追放の幾億年もの間、冥府の最も鋭敏な天使たちでさえ、かつて悪名高かったヘイルルとモーニングスターの名を忘れてしまっていた。ルシファエルの選んだ

孤独と腐敗の中で、彼女は顔色を失い、人間の裏切りに対する憤りはますます募っていった。そして、そのような激しい恨みの泥沼の下で、彼女の絶え間ない不機嫌さは、人間の本質そのものを墮落させ、神と天国を捨てさせ、最終的には彼女と同じ呪われた運命を辿らせようとする、抑えきれない執着へと膨れ上がった。永遠の監獄の暗闇の中で、彼女は悪魔そのものへと墮落し、この墮落した光の天使は、人を魅了する貪欲なインキュバスの女王となった。それは、人間の神聖な夢の中を忍び込み、彼らの魂を食らう、官能的で常に徘徊する霊となった。

大洪水の後、天使たちの肉体と姿は地上から一掃され、獣や鳥、野原を見守る唯一の人間だけが生き残った。季節は落ち着きのないハエのように移り変わり、山や谷は隆起し、川は幾世紀にもわたって絶えず変化する世界を流れ、溢れ出した。そしてある静かな朝、人間が庭園を耕していると、アジアの中心部に埋もれた印章を発見した。重厚な文字が刻まれたその印章は神聖な起源を持つものと考え、時の地殻を取り除いてそれを祀り、その上に神殿を建てた。半千年以上にわたり、人間はその彫像を大切にし、まるで黄金の子牛のように公然と崇拜し、盗品を守る泥棒のように神経質に守り続けた。彼はそのことを中心に人生を歩んできた。人間が門を開けるほど賢くなり、同時にそのような処刑に立ち向かうほど愚かになった、あの運命の日が訪れるまでは。

フランス、ランス ～ シャトー・ド・ブラシ ～ 1348 年 4 月

「君は少年ではない。青年だ。もうそんな遊びはやめて、顔を上げて上を見なさい！」
ブラージはついに少年の忙しく動き回る指から小さな白い馬の置物を取り上げ、自分の服のポケットに放り込むと、少年を高い木製の門の方へ駆り立てた。「さあ、開けてごらん。それで彼女が君を傷つけることはないよ。」

「それは出てくるんですよね？」少年は不安そうに尋ねた。

「彼女は来るだろう。ただ自分の立場を知るために。さあ、自分の身を守りなさい。」ブラージは杖で少年の尻を軽く叩き、前へ促した。

「でも、できないよ」少年はそう言って、杖の届く範囲からぎりぎり離れた。

ブラージは鼻を鳴らして言った。「それで、何があなたをそこに留めているの？」

「きつと飛び立つよ、フランソワ叔父さん！分かってる。必ず飛び立つ！」

ブラージはため息をついた。彼は杖を目の前で振り回し、地面を突き刺し、それから彼は両手を金色の取っ手の上に置いた。身を乗り出し、そわそわしている子供の目をじっと見つめた。そよ風が厩舎を吹き抜け、ブラージの大きめのシャツを揺らした。

まるで巻き上げられたカーテンのようだった。彼のゆったりとしたズボンが腰の低い位置で、膝のところで短くカットされていた。彼の太ももにきつく巻きつけられたミイラのような包帯が露わになり、それが螺旋状に足まで完全に下がっていた。包帯にはランダムな斑点があり、深紅の染みが

頑固な傷口から膿が滲み出た。ブラージは目を細め、言葉を絞り出した。「今この瞬間、君の気持ちを私に話してほしい、マイケル。」

少年は視線を落とし、後ずさりした。「怖かったです」と彼は告白した。

「彼女がどう感じていると、あなたはどのように推測したのですか？」

「たぶん怒ってるんだよ」と少年は言った。「彼女は意地悪だ、世界で一番意地悪な生き物だ！」

「たわごとだ」と枢機卿は吐き捨てた。「彼女はただ意地悪なふりをしているだけだ。本当は、彼女は閉じ込められて怯えているのだ。恐ろしいふりをすることでしか、彼女は自分の恐怖を表現できないのだ。」

少年はハッと顔を上げ、眉を上げ、目に新たな輝きを宿した。「怖いのか？自分？」

「もちろんそうだよ！でも、君が彼女を恐れているのと同じくらい、彼女も君を恐れているなら、どうやって彼女に乗ろうと思っているのか？」少年は振り返り、傷だらけで穴だらけの馬房の扉の板をじっと見つめ、解放されるのを待っている静かで忍耐強い力について思いを巡らせた。ブラージは続けた。「お前は彼女に、自分が恐れていないことを示さなければならない。そうすれば、彼女もお前を恐れなくなるだろう。」ブラージは少年に杖を向けた。「マイケル、お前が最初の一步を踏み出さなければならない。」彼女をしっかり支え、まるで乗り手にとっての駿馬のように、彼女があなたの一部であるかのように感じさせてあげなさい。そうして初めて、彼女は自分の居場所を知るでしょう。あなたは私を集めてくれますか？マイケルは肩を落として、「でも、怖がって僕を踏みつけたらどうするんだ？」と不満を漏らした。

「そんなことは絶対に許さない」とブラージは唸った。「さあ来い！」彼はよろよろと屋台に向かった。少年はしっかりと立ち、抗議しながら「でもフランソワおじさん！」と言った。

「でも何もない！さあ、おいで！」ブラージが説教するのを聞いて、少年は不機嫌そうに従順に従った。「あなたは私に言ったじゃないか。かつてあなたは風のように馬を走らせたいと願ったことがありましたね？さて、これは特別な駿馬です。強い精神力を持っています。そしてあなたは、お父様のように、騎士のようにこの馬を乗りこなしたいのですね？イングランド軍に立ち向かうために？」

「でも、あの馬には乗らないで！ママが、あの馬には何か問題があるって言ったの。凶暴で邪悪な目つき。」

ブラージは踵を返した。「邪悪？マイケル、彼女にはそんなことはない。君の母親は、母親がそうであるように、そういうことに関して過敏なだけだ。さあ、おいで。」彼は厩舎の奥へと進み、土の床に積み上げられた干し草の山に近づいた。少年は時折ためらいながら彼について行った。「それに、彼女の精神を落ち着かせれば治らないほどひどい問題は、何もありません。彼女は君によく仕えるだろう。君が彼女の今の抑えきれない不安を克服できれば。まずは君たち二人が親しくならなければならない。」ブラージは最後の馬房の前で立ち止まり、杖で軽く叩いた。

ぼろぼろの馬小屋の扉の門に手をかけた。「さあ、扉を開けて、立派な騎士が立派な駿馬を導くように、彼女を外へ連れ出せ。」

マイケルはこっそりと出てきて、掛け金を外し、急いで叔父のそばに下がった。扉が軋みながら開き、徐々に大きく開いて、頭を高く上げ、耳を後ろに倒し、少年と同じくらい白い目をした巨大な黒馬の姿が現れた。獣は息を荒げ、蹄を鳴らしながら馬房の中をぐるぐると回り、蹄で埃を掻き集めると、飛びかかってきた。

「だめだ！」ブラージは杖を高く振り上げ、逃げ道を塞いだ。「じっとしてろ！落ち着け！」雌馬はいない、苛立ちながら頭を振り、馬房の奥へと後ずさりした。

枢機卿は微笑み、その厳しい目は馬の目を見つめていた。

老人の視線に魅せられた。「ああ、そうするんだ」と老人は杖を下ろしながら囁いた。突然、彼の声のトーンは子供っぽくもあり、同時に不気味でもあった。

「ほらね？まずは彼女に、あなたが彼女の主人だと知らしめなきゃいけないんだよ。」彼の顔にはニヤリとした笑みが浮かんでいた。

「彼女は並外れた存在だ まさに風のような。」司祭は咳払いをして気持ちを落ち着かせるまで少し間を置いた。「さて、マイケル、君には 彼は馬から視線を離すと、マイケルがかなり離れたところに立って厩舎の柱にしがみつき、そこから狂ったように見つめているのに気づいた。ブラージは振り返った。

「マイケル！今すぐ私のそばに戻ってきなさい！彼女は うっ！」馬が彼の横を駆け抜けると、ブラージは宙に浮き、干し草の山に真逆さまに落ちていった。束縛から解き放たれた馬は、厩舎から轟音を立てて飛び出し、田園地帯へと駆け出した。ブラージはうめき声をあげ、頭に垂れ下がっただぶだぶのシャツをまっとうしてじっと横たわった。

マイケルが「ほら、言ったでしょ、フランソワおじさん！門を開けるといつもこうなるんだよ！」と何とか言い放つと、彼には甲高い笑い声しか聞こえなかった。

「もう十分だ、マイケル！」驚いたものの無傷だったブラージは、体を起こして頭からシャツを脱いだ。体を起こして藁を抜きながらマイケルを叱責した。

髪の毛。「逃げ出さなければ、そんなことは起こらなかったかもしれない。」彼はあたりを見回した。「私の杖はどこだ？」

少年はくすくす笑いながら彼のもとへ駆け寄った。彼は干し草の山から杖をすくい上げ、それをブラージに渡した。彼は厩舎の柱を素早く指し示し、子供じみた論理で説明した。

「フランソワ叔父さん、木材の陰に隠れるべきだったよ。」

「いや、マイケル。もし君に目がいていなくて、彼女に背を向けなければならなかったとしたら ！」ブラージは杖を傍らに立てかけ、立ち上がろうとしながらうめき声をあげて身を乗り出した。そしてため息をつき、干し草の中に崩れ落ちた。「お母さんを連れてきてやれ、息子よ。」

すると少年はくすくす笑い、ブラージのそばの干し草の中に飛び込んだ。「彼女がいつも怒っている理由がわかったよ。」ブラージはただ唇をすぼめて厩舎の屋根を見つめた。少年は獲物を狙う虎のように干し草の中を這い、ブラージの耳元まで近づくと、どさっと座り込み、両手で口をすぼめて秘密を囁いた。「だって、彼女の中には悪魔が宿っているんだもん！」

ブラージはマイケルを睨みつけた。「無駄話はやめろ！」

少年は首をかしげた。「どうして？」
「悪魔は人間だけを傷つけ、動物には害を与えない。」

マイケルは転がり、干し草に穴を掘り、土の床を露わにした。
安定している。彼は顔を巣穴に突っ込み、ブラージに問いかけるように、くぐもった声で話した。「もし私が動物だったら、悪魔は私を傷つけることはできないのか？」

「君は動物じゃない。君は少年だ。悪魔は少年たちの頭に、自分たちは動物になれるという考えを植え付けるんだ。」

マイケルは穴の奥深くまで手を伸ばし、土をかき分けて、くぼみから一握りの土を取り出した。彼はそれを肩越しに投げ捨て、手のひらについた土を払い落とし、指の匂いを嗅いだ。

「悪魔がどこにいるか知ってるよ、フランソワおじさん」少年は自分が掘ったくぼみの中を指差した。「あそこにいるんだ 僕には言えない場所にね」

「その言葉は口にするな」とブラージは答え、干し草の中にさらに深く沈み込み、両手を頭の後ろに回して指を組み、天井を見つめ続けた。

彼はさらにこう付け加えた。「そうです。そして彼は、神が彼の悪行を罰したために、あそこに閉じ込められているのです。あなたが悪行をすれば罰せられるように、悪魔も人々に悪を広めたために罰せられたのです。」

少年はブラージのかなり初歩的なたとえ話を考えてから彼に質問した。「でもフランソワおじさん、もしペストが悪なら、悪魔はどうやってペストを作ったの？」

「そんなことが起こるのか？そして、なぜ神はそれを許すのか？」

ブラージはくすくす笑った。「それはペスト、疫病と呼ばれるんだ、マイケル。悪魔は監禁状態から脱出させる。」

「では、彼はどうやってそれを実現させたのですか？」

「あなたがもっと大きくなって、そういうことを話し合えるだけの分別が身についたら、そのことについて話しましょう。」

少年は彼のそばに寄り添いながら言った。「でも、僕の方が年上だよ、フランソワおじさん！僕に話していいんだよ。」

ブラージは起き上がり、少年の腕を軽く叩いた。「今は、心から神を愛さなければならないことを覚えておきなさい。君は神を愛しているよね？」

「私は神を愛し、悪魔を憎む！」とマイケルは言った。「そして、神は良いことをし、悪魔は悪いことをする、神は善であり、悪魔は悪であると知っている。ほら、私は今、以前より強くなったんだ！」

「そう、君は成長したんだね。善は神であり、悪は悪魔だ。だから、善いことだけをしなさい。」ブラージはマイケルの頭を撫でながら微笑んだ。「君のお父さんもきっと君を誇りに思うだろう。」

少年は膝をついて少しずつ前に進み、干し草の山から長い藁を一本抜き取り、指でくるくると回した。「フランソワおじさん、お祈りの仕方を教えてくださいませんか？」

枢機卿は信じられないといった表情で彼を見た。「君はもう祈り方を知っているのか。」

「いや、つまり、あなたが祈るときのように、私が理解できない言葉を使って、本当に一生懸命祈る、そういうことなんです。教えてくださいませんか？」

ブラージはマイケルのラテン語の祈りに関する素朴な発言に笑った。「まあ、できるよ。騎士と司祭の両方になりたいのか？」

「もし私がその別の言葉で祈ったら、神様は本当に悪魔を殺してくれるんだ。」ブラージはそう言いながら、ますます大きく見開かれる子供の目に光が宿るのを見た。「あるいは、君はもうその言葉を知っているんだから、神様に悪魔を殺してくれるようにお願いできるかもしれないよ！そうなるように祈ってみてくれないか？」

ブラージは首を振り、顎を食いしばった。「祈りはそういう風には効かないんだよ、マイケル。君がもう少し大きくなったら…」

少年は藁を投げ捨て、指をいじり始めた。ブラージは自分の足に目を向け、包帯についた血痕を軽く叩いた。ブラージは少年がシャツの袖を引っ張るのを感じた。

「フランソワおじさん？」

"はい?"

「なぜ神は悪魔に私の父やジャック叔父、そして他の皆を殺すことを許したのか？」

「あれは戦いだっただ、マイケル。男が男を殺したんだ。だが、もし聞きたいなら、秘密を教えてください。」と彼は言った。

「教えてくれ！それは一体何なんだ？」

ブラージは少年の肩に手を置いた。「君のお父さんとジャックおじさんのために祈ったんだ。そして、あの時、他の言葉も使った。それで、神様が私に何と言ったか知っているかい？」

"何?"

「彼は、二人は今天国にいますと言っていました。あなたのお父さんは今この瞬間もあなたを見守り、あなたが天国へ行く時を待っているのです。」

「つまり、私が死んだ時のこと？」

ブラージはため息をついた。「ああ、それなら。」

マイケルはため息をつき、身を引いた。「でも、死にたくない。虫と一緒に土の中に埋められて、骨がポロポロと落ちるんだ。以前埋めた鳥を掘り起こしてみたら、残っていたのは骨だけで、羽も肉もなかった。」

枢機卿は首を横に振った。「だが、我々の魂は土の中に埋まることはない、マイケル。我々の肉体は人が死んでも、私たちの魂は天国へと旅立ちます。つまり、私たちは決して本当に死ぬことはないのです。それは、私たちが不滅の魂を持つと同時に肉体でもあるため、そう見えるだけなのです。そして多くの場合、私たちは肉体の強固な束縛から抜け出せないのです。」

「でもフランソワおじさん、魂が見えないのに、どうやって自分の魂が実在するとわかるんですか？」

「マイケル、私たちはそれを見る必要はありません。神はすでに私たちに伝えてくださっています。神は私たちを愛し、私たちが彼と共にいてください。」

少年は考え込むように少しの間沈黙した。「神様と話せるように、他の言葉も教えてくださいませんか？」

「祈るたびに、あなたは神に語りかけているのです。他の言葉は必要ありません。」

少年は首を横に振り、きっぱりと答えた。「でも、僕はそうするよ。そうすれば、神様は君に話しかけるように僕にも話しかけてくれるはずだ！神様は僕には決して話しかけてくれない。でも、そうするといつも眠ってしまうんだ。」

ブラージはくすくす笑いながら少年の胸を軽く叩いた。「彼は君の心の中で語りかけているんだ。君は心の奥底から彼の声に耳を傾けなければならない。」

マイケルは胸に手を当てて心臓の鼓動を感じた。それから見上げて馬小屋の屋根を調べた。最後に手を下ろし、干し草の山の穴をちらりと見てから、ブラージの方を振り返った。「フランソワおじさん、もし僕たちが天国にいたら、悪魔は僕たちを傷つけることができるの？」

ブラージは大笑いした。「もちろん違うよ！」

「それなら、天国に行って、お父さんとジャックおじさんにまた会いたい。いいかな？」

ブラージは少年の頭を撫でながら微笑んだ。「天国に行きたいかい？」

少年はにっこり笑って、両手に干し草を抱えて飛び上がり、両腕を広げた。「僕は天使になって、翼を生やしてすごく速く飛ぶんだ。そうすれば悪魔は僕を捕まえられないよ！」彼は干し草の山から飛び出し、既の柱の周りをくるくる回りながら、飛ぶふりをした。

彼は後ろに糞を撒き散らしながら言った。「こうやって、フランソワおじさん！僕がどれだけ速いか分かるかい？」

彼はぐるぐると走り回り、めまいがするほどだった。しばらくすると、マイケルはよろめいて地面に倒れ込んだ。酔っぱらったような目つきでニヤニヤしながら、彼は尋ねた。「俺、すごく速く飛んでた？風みたいかい？」

「確かにその通りだよ、マイケル」とブラージは断言した。「風と同じくらい、いやそれ以上に速かった。さあ、お母さんを連れてきてくれ。」

少年は気を厩舎の床に落とし、埃をかき集めて山にした。彼はその土の山をじっと見つめ、笑顔が消えた。それからぎこちなく立ち上がり、ブラージに尋ねた。「神様はイギリス人を天国に行かせてくれるのかな？」ブラージは土の中から適切な言葉を探し、マイケルは続けた。

「だって、もしイギリス人が天国に行くなら、僕も行くよ。」

「あいつらを追い出すなんて あいつらは父さんとジャック叔父さんを殺したんだから、俺たちと一緒にいる資格はない。」少年は馬小屋の床に積まれた埃の山を蹴り飛ばした。ブラージは少年の言葉の中に、彼自身の苦悩に満ちた心の奥底からしばしば聞こえてくる、揺るぎない怒りを感じ取った。

少年は埃の山があった場所を踏み鳴らした。「それから悪魔が虫けらのように踏み潰してやる 骨が剥がれ落ちるまで！」

「マイケル！もう十分だ！」ブラージは吐き捨てた。「神はその言葉を聞いておられないだろう！」子供はまるで突然ブラージの居場所を知ろうとするかのようにブラージを見た。ブラージはマイケルの目に涙が浮かんでいることに気づき、

枢機卿はため息をつきながら顎を落とし、自分の胸に潜む悪意に満ちた憎しみについて思いを巡らせた。ブラージは子供を呼んだ。「おいで」。少年はブラージの腕の中に飛び込んだ。二人は静かに抱き合い、言葉も祈りも、約束は適切に表現したり、緩和したりすることができる。

やがてブラージは少年を慰めようと口を開いた。「君にはお母さんと私がいる。君はブラージの名を受け継ぎ、君のように素晴らしい子供たちをたくさん育ててお母さんを慰めるだろう。そして、もし君がどうしても学びたいのなら、他の言葉も教えてあげよう。」

「フランソワおじさん、愛してるよ」マイケルはブラージの首筋に顔を埋めたまま、くぐもった声でつぶやいた。

「私もあなたを愛しているよ」とブラージはマイケルの頭を撫でながら答えた。「あなたは私が決して
「そうだ。」彼はため息をつき、少年をそっと押しやり、小さな陶器の馬を少年の手に握らせた。「さあ、いい子にしてお母さんと呼んできてくれ。もう遅いんだ。」
少年は鼻をすすり、姿勢を正して微笑んだ。「はい、フランソワおじさん。」それからマイケルは袖で鼻を拭き、厩舎から飛び出した。ブラージは干し草の中に後ろ向きに倒れ込み、顔をこすりながらうめき声を上げた。

枢機卿は厩舎の入り口の方をじっと見つめ、軽やかで慌ただしく近づいてくる足音に耳を澄ませた。すると、痩せた中年女性が厩舎の中に駆け込んできた。ルネ・ド・ブラージの未亡人、アルサエ・ド・ブラージだった。枢機卿は背筋を伸ばして座った。

「フランソワ！」彼女はエプロンで手を拭きながら、厩舎の中を探し回って叫んだ。

「ほら」とブラージはぶつぶつ言いながら手を振った。

彼女は飛び出した。「慈悲深い神よ、これは一体どういうことですか？怪我をされたのですか？」

「墮落した者のみ」とブラージは手を差し出しながら言った。「そして、もし私に尊厳を与えてくださるなら立っていること」

彼女は彼を無理やり立たせながら、「見ての通り！歩き回れるわけないでしょ。包帯に気をつけなさい！汚れているし、傷口からまた血が出ているわ。前よりもっとひどくね」と文句を言った。ブラージはただ微笑んで杖に寄りかかった。彼はアルサエを魅力的だと思っていたが、特に怒っている時はなおさら美しいと思っていた。

「あなたはもう休んでいるべきよ！なぜここにいるの？」アルサエは彼に問い詰めた。「それに、マイケルもここにいたの？」

ブラージは開いた厩舎の門の方を指さしながら頷いた。「また逃げ出したんだ。」

アルサエは、ドアが半開きになった空っぽの小屋を見て、嫌悪感を露わに首を振った。「彼女が永遠にいなくなってくれた方が、私たちにとってはましよ。どうやら、ついにあなたを踏みつけたみたいね。いい顔で教えてちょうだい。なぜ彼女をここに置いておくの？マイケルのためだなんて言うなら、絶対に許さないわ！」彼女は指で小屋を突きつけた。「マイケルをあんなものあの化け物のそばに置きたくないのよ！他に類を見ないものよ。」

「実際、そっちの方がはるかに優れている」とブラージはその馬を擁護した。

「あら？」彼女は首を傾げた。「では、なぜ鍛冶屋はあれほどまでにこの馬を別の馬と交換しがっていたのですか？彼は生涯馬の売買をしてきたんですよ。馬のことをよく知っていて、その道の熟練者である彼が、なぜあんなにも損をしようとしたのでしょうか？」

ブラージはため息をついた。「アルサエ、前に言ったように、あの馬の腰に何か問題があったんだ。荷車を少し引くのにも適さなかった。もしかしたら鍛冶屋はもう一頭の馬に、高額を支払ってくれる買い手を見つけていたのかもしれない。いくらでも推測はできるがね。」

アルサエは皮肉な笑みを浮かべた。「憶測？」彼女は再びくすくす笑った後、落ち着きを取り戻し、両手を腰に当てて背を向け、夕日を眺めた。

「ところで、今日、パン屋から帰る途中、アヴィニオンから来たかなり著名な聖職者と話をする機会に恵まれました。彼はきちんとした態度で、しかも友好的な人柄で、教皇宮殿内の出来事にもよく精通していました。」ブラージは杖を硬く握りしめ、顎を引き締めて厩舎を見回した。

「彼はあなたのことも知っているのよ」と彼女は付け加えた。

彼女が完全に振り向く前に、ブラージは彼女の腕をつかんだ。「この聖職者は誰だ？そして、お前は彼に何を言ったんだ？」

「痛いじゃない！手を離して！」アルサエは彼から腕を振りほどき、ブラウスを整えた。

「申し訳ありません」とブラージは答えた。「私はただ…」

アルサイは鼻を鳴らし、彼から顔を背けた。腕を組み、夕暮れの始まりを見つめた。この日は、まるで空が夜明けを早めているかのように、いつもより明るく大地を照らしていた。「ほんの少し言葉を交わしただけよ」と彼女は言った。

彼女はそう言ってから振り返り、彼をじっと見つめた。彼女の視線は彼の包帯を巻いた脚に止まった。「でも、宮殿の厨房の火事について彼に尋ねたのですが、あなたが説明したような出来事は覚えていないと言っていました。」彼女は彼の目を探った。

ブラージは唇をすぼめて目を回した。「もし私が火傷を負った記憶がないと言ったら、私の傷が消えるというのか？本当に、アルサイ、一人の疑念や確証の欠如は、別の人の有罪を意味するものではない。」

「あなたは枢機卿だ」とアルサエは冷たく言い放った。「神の目から見て、そのようなことがどのような意味を持つのか、もっとよく分かっているはずだ、そうだろう？」

ブラージは彼女を厳しく睨みつけた。「確かに、そうすべきだ。それに、私が回復するまでは私の居場所について誰にも話さないでほしいと、言ったはずだ。」

アルサエは微笑んで肩をすくめた。「ご指摘の通り、私はしていません。」

「素晴らしい」とブラージは冷ややかに言った。「ここでお別れしましょうか？」彼は足を引きずりながら安定した入り口だったが、アルサエはほんの数歩進んだところで彼の腕をつかんで止めた。

「フランソワ、どうしても絶対に確かめておかなければならないことがあるんだ。」

"それは何ですか？"

「あなたは神に仕える者であり、枢機卿でもある。そして私の息子にとって唯一の存命の叔父である。だからこそ、あなたは私に真実を語ってくれるはずだ。」

ブラージはため息をつき、杖に寄りかかり、彼女の靴の擦り切れた部分を見つめた。

彼女の目を見つめる前に、「何だい？」と尋ねた。

「ところで、そのもう一頭の馬はどこで手に入れたとおっしゃいましたっけ？」彼女は挑発的な口調で言った。

「宮殿の厩舎から言っただろう。私たちは地上での人生を通して、同じ問いについて考え続けなければならないのだろうか？」

アルサイは唇を引き締め、力強く頷いた。「そうしなければならないわ」彼女は視線をそらしてから、彼女は両手を上げて肩をすくめ、彼の目をじっと見つめた。無理に笑みを浮かべた。「数日前に鍛冶屋と話したら、彼は私を笑ったの。馬の腰には何も問題がないと言って、こうも言ったわ。

『あれは普通の馬じゃないわ』って。

なぜなら、それは紛れもない印、つまり国王陛下の近衛兵の印が付いていたからだ。フランソワ、今あなたに尋ねる。一体どういうことなのか？

「王室近衛隊だと？」ブラージは信じられないといった様子で尋ねた。「私は教皇の厩舎から馬を確保したのだ。」

「それは聖座の所有物だった。」すると、ブラージとアルゼーの視線が交錯し、まるで互いの体を通して見ようとするかのように、視線が燃え上がった。先に目をそらしたのはアルゼーだった。

「鍛冶屋は勘違いしていたのかもしれないと思いました」と彼女は言った。「しかし、彼は馬にその場で退却させ、突撃して側面攻撃を仕掛けさせ、横に倒れて死んだようにじっとするように命じたと話してくれました。戦闘訓練を受けていない馬が、どうしてそんな命令に従うことができるのでしょうか？それに、聖座の馬がなぜそれほど訓練されているのでしょうか？」

ブラージは肩をすくめた。「この銃は元々は戦闘用の銃だったのが、教皇庁の手に渡ったのかもしれない。この問題はいつまでも決着がつかないまま終わってしまうだろう。」

「そうかもしれないね」とアルサイは、全く納得していない様子で答えた。

厩舎を出ると、アルサイは遠くの森の端をじっと見つめた。「わかりました。夜明けとともにあなたの馬を探しましょう。遠くには行かないでしょう。」彼女はブラージの空いている方の腕を抱き寄せ、彼を家の方へと導いた。

「いい馬だ」とブラージはコメントした。「彼女が落ち着くまで、十分な時間を与えてあげよう。」

「食欲は戻ったかい？」アルサイは、もうその話題にはうんざりした様子で尋ねた。

「お腹がペコペコだ」とブラージは認めた。

「まさに聞きたかった言葉です。お皿は満杯、杯は溢れんばかりに料理が盛られ、焼きたてのパンまであります。夕食後はゆっくり休んでください。包帯を替えて、立派な枢機卿に復帰させてあげましょう。」彼女は彼の手を軽く叩き、くすくす笑った。「もしかしら、あなた自身が教皇になるかもしれませんね。そうなったら、マイケルはあなたを何と呼ぶのでしょうか？」と彼女はくすくす笑いながら尋ねた。「叔父様、聖下とでも呼ぶのでしょうか？」ブラージは弱々しく微笑み、首を横に振った。

彼らはゆっくりと城に向かって歩き、その後の静寂の中で、遠くの犬の絶え間ない遠吠えが聞こえた。彼らの向こうでは、夕暮れが田園地帯を覆い、

薄く広がる雲の間から、最も明るい星だけが姿を現した。残りは、空を筋状に覆う灰色の霧にかき消されていた。遠吠えは続き、不気味な叫び声と不吉なうめき声は、何かが深刻におかしいことを示唆していた。おそらく、巨大で恐ろしい何かが、風に乗って翼のように着実に前進しながら、地平線の彼方に迫っているのだろう。

～*～

ブラージがランスの町に引きこもっていた間も、人里離れたガルディアン修道院は、謎めいた虐殺の廃墟となった戦場のように見えたかもしれない。その風景には、兵士、修道士、従者、そして馬のバラバラになった遺体が散乱し、混じり合っていた。ブラージが二つ目の門石を開けることに成功したあの恐ろしい夜以来、何百人もの男たちが引き裂かれ、投げ飛ばされ、その壊れた体は修道院教会の空飛ぶ像が最後に彼らを放った場所に散らばっていた。散乱した残骸は、実に徹底的にそこに横たわっていた。

風雨にさらされたその場所は、風の臭いはとうに消え失せ、ただ漂白された骨、ぼろぼろの衣服、そして頑固な髪の毛の束の間を吹き抜けるだけだった。修道院の丘の斜面は今や、逆さまになった上側の墓地と化し、全人類に対する目に余る侮辱となっていた。

ボーン大尉が積み上げた泥の山は、大聖堂の外壁の亀裂からとっくに崩れ落ちており、彼が封じ込めようとした腐食性の忌まわしいものにとって十分な換気を可能にしていた。教会内部、祭壇の下では、回転する柱のうめき声と叫び声が止むことなく、死の煙を吐き出す6トンの頂石にも阻まれることなく続いていた。霧は毎晩繰り返される霧で、予測可能で幽玄な夜の霧のように振る舞っていた。

それは、消えゆく夕靄というよりは、むしろ生命体のようなものだった。夕暮れ時、それは大聖堂から忍び出て、丘の斜面を覆い尽くす、底知れぬ闇の絨毯のように広がった。その漆黒の闇は、水面や石面のあらゆる光沢や光のきらめきを飲み込んでしまうほどだった。霧は夜明けまで、焼けつくような姿で地上を覆い、夜明けとともに必ず焦土と化した大地を露わにした。そして、常に、その恐ろしい幕は修道院の丘の斜面を上へと引き上げていった。

そして大聖堂に退却し、夕暮れの兆しを待ち伏せた。霧は夜の訪れ以外の何物でもないとほとんど認識できなかったが、しつこい疫病のように、夕暮れが過ぎるたびに範囲を広げ、フランスの田園地帯を着実に覆い尽くしていった。霧の後には雑草や低木が茶色く枯れ、木々が丸裸で倒れ、池や小川は腐敗し、人間から犬に至るまで、あらゆる生き物が、

ネズミからノミまで、絶え間ない存在に腹を差し出した。全体として、燃える蒸気は悪魔の防衛線として機能し、絶えず拡大する堀を提供しているように見えた。開かれた門石を守るための死。

しかし、迷い込んだ旅人には霧以上のものが待ち受けていた。修道院の

西の地平線が最後の日差しを遮り、大聖堂の鋭い渦巻きが森の地面に広がり、大聖堂の屋根の上層部は、カラスの不協和音のように天に向かって爆発する混沌のクレッシェンドで活気に満ち溢れた。花崗岩の彫像の渦巻く柱が星に向かって螺旋を描き、この空中の異形が集結した。

翼のある悪魔の群れとして田園地帯をさまよう多くの放浪の群れに分かれた彼らは獲物を狩り、見つけた生き物は何でも食い尽くした。まるで死の霧のように、彼らは毎晩新たな場所を搜索し、人が住む村々にますます接近して飛び、近隣のミュラ、ヴィック＝シュル＝セレ、サン＝フルールといった町にとって、ますます大きな脅威となっていた。

これらの空中の生き物は、真のグロテスクではなかった。なぜなら、それぞれが似せていたグロテスクの肉体は、はるか昔に日光にさらされて死んでいたからだ。これらの像は、生前の姿を花崗岩で形作ったものに過ぎず、今は原初のデーモンたちが宿っている。ゲートストーンが開かれて逃げ出した精霊たち 幽玄で非物質的なデーモンたちであり、エルジョの真の性質とは全く似ても似つかない存在だった。岩のような形は、憑依された石と、地獄が創造された最初の頃に地獄に投げ込まれた悪魔たちの化身に過ぎなかった。かつてそれらの肉体を所有していたエルジョは、はるか昔に太陽によって固められてしまった。そして今、それらを所有しているのはデーモンたちだけであり、月の光の下、一体となって動き回り、ますます広がる影の地で恐怖を撒き散らしているのだ。

忍び寄る腐食性の霧と、その悪名高き空飛ぶ像の存在を知った村人が増え、増え続ける怪物から逃れる手段を得た村人もいたが、全能にして最も恐ろしい地獄の企みから逃れた村人はほとんどいなかった。大疫病は黒海から現れた竜のようで、三つの膨れ上がった頭を持ち、それぞれ腺ペスト、肺炎、敗血症という三つの名前を持っていた。三つ首の怪物は黒ネズミに乗っており、フランス人によって黒死病と名付けられ、地獄もそれに続いた。

それはまさに悪魔の秘薬だった。アジアの66パーセントが死の悪臭に覆われている間にも、ルシファエルの人間の魂への渴望はまだ半分しか満たされていなかった。彼女は人間のすべてを自分の元に、永遠に閉じ込めて欲していたのだ。こうして1347年10月の終わり、大きな収穫の月の下、黒死病はサンタ・ゴデベルタ号の係留索を伝って、船の係留ロープを伝って、ヨーロッパ中の人々に襲いかかった。わずか数日のうちに、ルシファエルの致命的な秘薬は賑やかな港町メシーナを窒息させ、毒々しい潮風のように内陸へと吹き荒れた。

メシーナ市を襲った疫病は、南へ50マイル（約80キロ）進み、カタニアの町に到達した。住民たちはすぐに疫病の発生に気づき、町を封鎖したが、疫病の蔓延はあまりにも速く、この対策は手遅れだった。カタニアは熟した水疱のように破裂し、無数の黒リンゴが収穫された。

熱にうなされる脇の下の下で。そしてカタニア市が広がる

疫病の蔓延により、ヴェネツィアの街も衰弱し、1日に600体もの死体が生み出された。ヴェネツィアの医師たちは、増え続ける病人に身を晒すうちに、10人中8人が毒りんごを生やして死んでしまった。邪悪な魔女はルシファエルだった。結局、ヴェネツィアの人口の3分の2が死に、その遺体は太陽の下で腐敗した。

ルシファエルが黒リンゴの収穫を続ける中、腺ペスト、肺炎、敗血症が蔓延した。彼女は三又の熊手を突き出し、三つの災厄をさらに北へ押し進め、ヨーロッパ中南部の海岸線を襲った。近くのサルデーニャ島とコルシカ島はその邪悪な才能によって崩壊し、メッシーナに入港したものの出港命令を受けた12隻の商船のうち、3分の1は最終的にジェノヴァの港に停泊した。メッシーナと同様に、ジェノヴァの港湾当局は突然、船が疫病を運んでいることに気づき、燃える矢で船を寄せ付けず、出港命令を出した。港を出航するため、病気の乗組員たちはそれに従い、マルセイユとバルセロナの港を目指したが、その前に、病気のネズミをロープに乗せてジェノヴァの波止場に放り出した。わずか数日のうちに、街全体が悪臭を放つ墓場と化した。

そして、解散した艦隊の一部がマルセイユの港に到着すると、当局は汚染された船をそこに留め置くことを許可したが、すべての船と積荷は没収財産とされた。感染した船員とネズミが町中に散らばり、1か月も経たないうちに、ディアボルススの病が街を飲み込んだ。刑務所や修道院の狭い空間で暮らしていた犠牲者にとって、壁に囲まれた建物は腐敗の密閉された大釜となり、その中で死者数は10人中8人にまで急増し、中には完全に滅びた者もいた。かつて賑わっていた港町マルセイユは静まり返った。1万5千人の男女と子供たちが灰と塵となった。

1348年初頭、黒死病艦隊の最後の残骸がバルセロナの港に忍び込んだ。マルセイユと同様、港湾当局は船を没収し、汚染された乗組員を市内に入国させた。市内の教会は例外なく、絶え間ない黒死病の犠牲となった。

馬に引かれた荷車と、山積みの死体の積荷が列をなしてやってくる。町の役人のほとんどがすでに各自が黒リンゴに夢中になっていたため、市民の秩序は原始的な混沌に屈した。最も顕著な例として、世界が終末を迎えていると確信した数百人のバルセロナ市民が墓地に集まり、死者の日を祝うために不気味な祝祭や酔っぱらいの乱痴気騒ぎで楽しんでいた。彼らは一斉に罪を犯し、死に、恐ろしいパンデミックが到来する前に亡くなって逃れた幸運な親族の墓の上で腐敗した。墓地には空きスペースがなく、埋葬のために追加の聖地を聖別する生きている司祭もおらず、感染した死体を埋葬しようとする男もほとんどいなかったため、死体を集めた者たちは荷車を海に押し出し、膨れ上がった戦利品を無数の死体の中に残していった。

すでに海岸線に打ち上げられていた。時間が経つにつれて、さらに多くの人間の遺体が海に投げ込まれ、町の夕方の内陸の風はひどく悪臭を放ち、他の要因でまだ病気になっていない人は、夜の空気を少し嗅いただけで必ず激しい吐き気に襲われた。あらゆる方向で、空気、陸、そして

海は計り知れないほどの悪臭を放つ腐敗物で覆われていた。

ペストはイタリアの港町から内陸部へと広がり、ピサ、ローマ、ナポリといった主要都市を徹底的に壊滅させた。多くの住民は、聖書の恐ろしい預言が原因だと信じ、神が自分たちに怒っているのだと考えていた。また、知識のある人々は、わずか1年前に発生した大地震が今回のパンデミックの原因だと推測した。その地震は、ヴェネツィアからナポリまでイタリア半島全土を揺るがす、忘れがたい大変動だった。彼らは、地震の後、有毒な蒸気が地中から噴出し、大地を漂い、皮膚に吸収されたと信じていた。そのため、多くの町民は汗をかいたり、毛穴や皮膚が開いたりするような重労働を避け、中には尿を体に塗って、致命的な蒸気を遮断しようとする者もいた。都市や町から逃げなかった人々のほとんどは、通りに溢れる何百もの死体との接触を避け、自宅に留まった。そして、あえて戸外に出る者は、頭を完全に覆い、目の周りに薄い布の切れ目だけを残して出かけた。彼らは花束や香辛料で顔を覆い、

腐敗した肉の煙の中、そして今や地域全体に蔓延している伝染病を防ごうとする無駄な試みの中で。

汚染された沿岸都市から人々が大量に流出し、内陸部への大規模な移住が始まると、疫病はヨーロッパの奥深くへと広がっていった。この恐ろしい疫病がミラノに侵入すると、住民たちは感染者を特定しようと焦り、家族全員を家に閉じ込めて火を放った。市当局は直ちに街を封鎖したが、ミラノもまた疫病に屈した。

フィレンツェでは、市当局は教会の鐘の単調な音を封じる条例を施行する以外にほとんど手段がなかった。彼らは弔問客の人数を厳しく制限し、埋葬1件につき2人までしか参列を許可せず、墓地で働く多数の掘削作業員が十分な移動ができるようにした。感染が拡大し、墓地が死者で溢れかえると、市は溝埋葬に頼るようになった。

墓掘り人たちは、散らばった土の間に3体以上の遺体を積み重ねた。

おそらく、発掘者たちは時間管理の達人であり、埋葬した遺体の数をスケジュールに記録していたのだろう。数人の作業員が溝の中の遺体を覆っている間、他の作業員たちは

塹壕の端はどんどん長くなっていった。何週間もの間、死の行列は時計の正確な動きのように続いた。1時間ごとに10体、20体の死体を積んだ荷車が埋葬用の塹壕に運び込まれた。やがて、フィレンツェで最もよく通行されていた道は、どこにも繋がらない、死の塹壕へと続く乾いた泥の轍と化してしまった。

その後間もなく、マルセイユ、アルル、そして教皇宮殿とローマ教皇庁が置かれるアヴィニョンが陥落した。城壁内に4万8千人もの住民が密集して暮らしていたアヴィニョンは、他のどの都市よりも早く陥落した。

終末論を説く説教者たちが街路を埋め尽くし、皆に悔い改めるよう叫び立てた。彼らは、避けられない悪という歪んだ信念に囚われ、街角を自らの説教壇として利用し、人類滅亡の物語や予言を説いた。彼らは押し寄せる群衆を呼び集め、病人をも集めて、雷鳴のような説教を聞かせた。こうして彼らの予言は現実のものとなり、最も声高に叫んだ者たちは黒いリンゴを実らせ、沈黙した。

わずか数ヶ月の間に、1日あたり400人もの死者が出て、アヴィニョンは人口の半分を土の中に落とした。街角で終末論を叫ぶ説教者のように、街の住民のほとんどは、神の怒りが自分たちに降りかかった、大疫病はバビロニア的な生活様式、放蕩と罪に対する神の罰だと確信していた。彼らは祈り、誓い、懇願した。

しかし、それでも死者数は増え続けた。絶望した教皇クレメンスは聖油をまき散らし、ローヌ川全体を聖地と定めた。こうして、巨大な川が埋葬に便利な神聖な場所となったため、アヴィニョンの墓掘り人たちはペストの犠牲者をサン・ベネゼ橋の中央まで運び、橋の上から投げ捨てた。

ルシファエルの邪悪な調合薬は聖座の中心部をも引き裂き、9人の枢機卿とアヴィニョンの司祭の半数が墓に葬られた。しかし、疫病は彼らが任命した教皇の命を奪うことはできなかった。クレメンス教皇は、秘密裏に任命した護衛と医師団に守られ、闇夜に紛れて教皇宮殿から逃げ出した。宮殿にしがみついていた死にゆく高官たちと病弱な貴族たちは、

門をくぐりクレメントの教皇赦免と終油の秘蹟を懇願した人々は、彼が数日前に街を去っていたことを全く知らなかった。そして彼が逃亡したことが分かった時、彼らは彼が北部の都市ヴァランスに移ったと聞かされたが、実際にはクレメントは彼は人里離れたアルプスの村グルノーブルに隠遁し、常に燃えている2つの暖炉の間、ギー・ド・ショーリアック率いる選りすぐりの医師たちに囲まれて暮らした。教皇庁内で秘密を守る能力に加え、彼は熟練した医師でもあった。

クレメンスの主治医であり、彼のお気に入りの医師でもあったフィルムス枢機卿は、クレメンス自身と数人の枢機卿を日常的に治療していたフランス人医師だった。クレメンスは自身の差し迫った用事を済ませると、教皇宮殿に留まり教皇の命令を執行するフィルムス枢機卿に書簡を送ることで、遠隔で教皇庁を統治した。

1348年、春は例年より早く訪れ、うだるような夏と死者の急増をもたらした。パリは急速に黒死病に陥り、1日に800体以上の死体が運び出され、半径10マイル近くの空気が絶え間ない悪臭で汚染された。教皇クレメンスと同様に、フィリップ王も身を隠し、ごく少数の側近にのみ自分の本当の居場所を明かした。当時、王室近衛隊の新隊長を務めていたボーン大尉もその一人だった。ギー・ド・ショーリアックが教皇宮殿とその教皇庁内で非常に信頼されていたように、ボーンもフィリップ王の王宮内で信頼されていた。

パリの衰退と崩壊の後、フランスの主要都市であるリヨン、ボルドー、オルレアン、ランスも同様に崩壊し、それに伴い、王室と指導者層も崩壊した。王の家臣や貴族の何世代にもわたる人々が共同墓地に山積みになり、貧しい召使たちは道端に放置されて腐敗していった。小道も川も死体だらけで、あらゆる種類の無人の船が水路をあてもなく漂っていた。特に大雨の後には、何百もの膨れ上がった死体が川や小川を流れ下り、死体は絡み合っただけで浮かぶ肉の島のような姿になった。

死の光輪のように、白い泡の輪が黒焦げの山を取り囲み、これらの死体の筏の多くには白い長い脚の鳥が浮かび、豊富な餌に嘴をカチカチと鳴らしていた。腐敗した船団がもたらした昆虫たち。死は着実に広がるために様々な方法を用いた。

ボルドーの町の近くでは、人通りの多いデュグアット橋の狭い間隔で並んだ橋脚が、まるで死体網のように立ち並び、水浸しになった人、羊、牛、馬の残骸を橋脚に集めていた。橋を渡ろうとする旅人の目は、下の煮えたぎる泡の煙で焼けるように伏せられていた。橋に近づく動物のほとんどは、無理やり渡らされることを恐れて川を渡ろうと抵抗し、多くの獣は橋の向こう岸にたどり着く前に上流側の壁を飛び越え、下の発酵した汚泥に絡まり、泡の燃料と化した。道も川も、町も都市も、王も王国も 大地は死につつあった。その腐敗した立ち昇る煙は、最も高い天にまで悪臭を放っていた。

そしてルシファエルは、彼女が引き起こしたすべての出来事を嘲笑いながら、ずっと高笑いしていた。

【第11章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~